

NO 159

全仏

8/45.

根本伝教大師曰く国宝とは何物ぞ、宝とは道心なり、道心ある人を名けて国宝となす。
故に古くの言く「径寸十枚は国宝に非ず、一隅を照らす、これ則ち国宝なり」と。



(天台座主 即真周滿貌下)

私ども須らく、この御精神を体して仏教各宗派の和合と教化の高度実現に期し、
僧俗一体となって国家の隆盛と人類の幸福に寄与せなければなら
ない。

大乘戒と小乗戒

宮林昭彦
(大正大助教授)

一、はじめに

わが国の仏教および仏教徒のあいだでは、戒律に対する関心はあまりたかくない。最近仏教の国際交流の面で、とくに東南アジアに伝えられている仏教は、すなわち南方仏教と、北方仏教との比較において、戒律の問題について関心が寄せられ、議論がなされたとも聞く。現在では、大乘小乗両戒対立ということはすでに過去の課題としてあつかわれている。しかし、現代において、仏教と道徳・倫理、教団自体の在り方、信徒の社会実践などについての問題を考察するとき、当然、戒律に関するいくたの問題が明確にされねばならない。

二、開かれた社会と自己の道

一般的には、大乘戒と小乗戒はどのように区別されているであろうか。単的にいうならば、日常生活と仏道との分離しているのが小乗戒で、生活と仏道が一体とみるのが大乘戒ということが出来る。具体的にいうならば、比丘の具足戒につながる七衆の戒が小乗戒で、瑜伽戒、または梵網戒を大乘戒とみて、それぞれの戒相を判別している。また、これとは別個に、分通大乘

説にもとづいて、七衆戒を菩薩の律儀戒の内容とし、小乗戒相も、持戒の心がまえによつては大乘戒となりうるとし、大乘戒といつても、七衆を除くものではないという立場である。

小乗戒は、みずからの証りをめざすため、自己の修道をきびしく規制する。一方大乘戒は、勿論みずからの行為をいましめることにはかわりはないが、他に対する行動にまで範囲が広められ、そこに重点がおかれる。小乗戒は自己の道を清浄に保つことにしぼられるのに対し、大乘戒の領域は、開かれた社会であつて、とくに利他の精神にもとづいている。比丘の四波羅夷として、まず淫戒という自己の身を正す戒がおかれているのに対して、菩薩の四重戒は、瑜伽戒では、自贖、毀他、慳法、慳財、不捨怨結、謗大乘であり、梵網十重戒が、殺戒という対他的な行動をはじめにおき、また律儀戒のほかに、撰善法戒、撰衆生戒が制せられてい

ることを考えてみても、よくうなずかれる。また、小乗戒をうけるときは、その心がまえとして一生の受持を誓うのであるが、大乘戒の場合は、永久の受持を誓うのである。すなわち、小乗戒は、サンガに対して、一生を期するのであるが、大乘戒では、過去、現在、未来の三世にわたる誓いなのである。したがつて、小乗戒では、戒をまもらんとする心がけがゆるいとき、犯戒におちいらぬように、それ

以前に捨戒作法を講ずるのである。

しかし、大乘戒においては、捨戒という作法はない。ひとたび戒をうければ「一得永不失」といわれるように、永久に失うことはないのである。もっとも、菩提の願を捨てるとき、および上煩惱によつて波羅夷法をおかすときは、菩提律儀を失う。上煩惱とは、たびたび犯し慚愧の心なくかえつて歡喜愛染して、違犯すること、功徳であると錯倒しているものである。これは、比丘が捨戒するような単純なことではないことがわかる。

これは、大乘、小乗両戒における根本的な立場のちがいであつて、この両戒のもつ性格から、受者の心がまえの差があらわれるのである。

さらに、小乗戒の場合、戒を授けるのは、戒和上、教授師、羯磨師の三師と七人の証戒師とであり、これは、サンガの代表者であつて、受具はサンガへの比丘受入式を意味している。ところが、大乘戒では、三世十方の諸仏、菩薩の前においてうけるのである。具体的には、釈迦牟尼、文殊師利、当來弥勒、十方諸仏、大徳諸菩薩と五師勧誘して受戒する形になつてくる。これは、十方三世の諸仏菩薩を対象とするものであつて、このような形になるのも、前述のように、大乘戒の性格が、三世のつながりと十方のひろがりをもつところから、必然的に展開されるところである。

三、形式主義と精神主義

前述のような区別をいいかえると他律と自律ということになる。小乗戒では五篇門の分類が示すように、軽いものは自己反省の突吉羅罪、一人に告白する提舎罪、四人以上の比丘によつて処置される提罪、二十人比丘による僧殘罪、そしてもっとも重い僧団追放の波羅夷罪というようにサンガの権威によつて定律的に処分される。

ところが、大乘戒は軽重の判はあるが、小乗戒がサンガによって処置せられるような他律的な意味からのもではなく、戒の性格自身の性戒か、遮戒かというちがひがあるのである。したがって、客観的に処置の差によるのではなく、いずれも自律的な懺悔によっている。

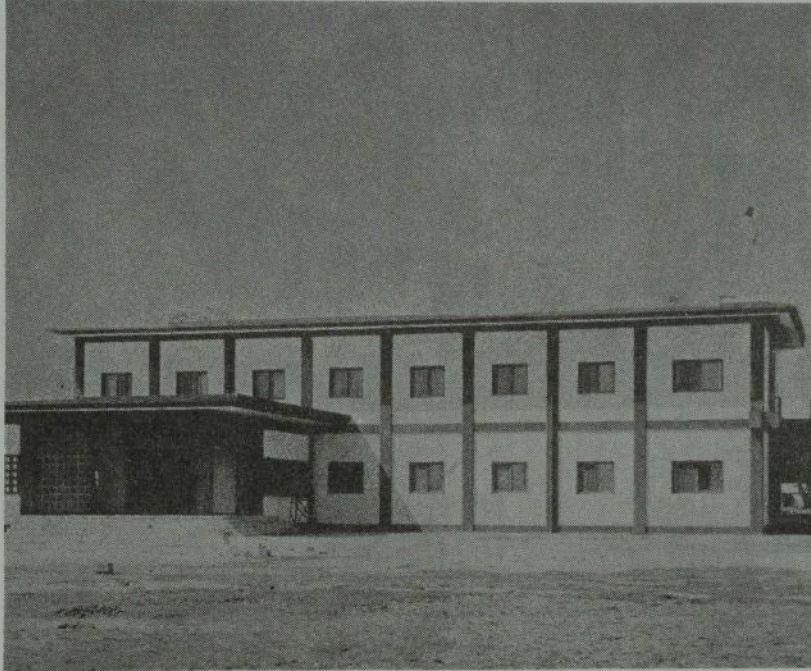
比丘が重罪を犯せば再び受戒できないのと異なり、大乘ではかりそめに一度波羅夷を犯すことがあっても再受がみとめられる。すなわち、僧団追放の他律ではなく、懺悔の自律にまかされている。この点では大乘戒と小乗戒はつながらない。しかし、無法に犯戒がみとめられているのではなく菩薩の生命ともいべき菩提の願心を捨てるとき、四重をたびたび犯して慚愧の心なく、かえって歓喜愛樂しているものは波羅夷罪である。それは追放罪ではないが、菩薩戒を失うのであるから菩薩の死を意味し、比丘の場合よりもきびしいものがあるわけである。ゆえに、この点においては、両戒は連続するところである。

また、小乗戒は、サンガの維持にうらづけられているから、つねに具体的な規制が要請されてくる。たとえば盗戒をくらべてみても、小乗戒では五錢という客観的な評価と、品物の場所をうつすという行動が犯戒の要因である。

ところが、大乘戒では、客観的にサンガにどのような影響があるかと、盗心そのものがいましめられるのである。犯戒の場合、小乗戒は、五篇門のさはきはつきりしているが、大乘戒では、軽重戒の差はあつて

も、すべて行者の懺悔にまつという、一律の処置である。

つまり、般若経や涅槃経などで強調されている有相戒と無相戒の相異である。これは、小乗戒がサンガの構成にそなえるものであるのに対し、大乘戒が行者自



ブダガヤに建てた国際仏教会館

身の修道のためにするところから、必然的にみちびかれる結果である。

そこで、一方は外部のサンガの規制に重点をおき、形式にとらわれる傾向が生まれ、他方は、内にむかっ

て精神的なきびしさをもとめるが、かえって抽象的観念的に空転して実際にむくことにもなるのである。

四、一つの戒の二面

以上の対比を総括して考察してみると、修戒と性戒のちがひにおさめられる。それは、戒を修習ということに限定すると、本性に直結して見るのとの差である。

小乗戒が規制するところは、おもに身口の過非であり、意業は定慧の待治にゆずられる。

大乘戒は三学一体にたつて、身にはもとより意業に重点をおいている。小乗戒が修道の道程で随犯随戒されたものであるのくらべて、大乘戒では、十重として具体的な戒相を示している。

かように、両戒の差異は、たしかに二つの対比すること自体に大きな意味をもち、戒律の本質を明かすことであるが、しかし、もっと重要なことはそれらを総合的に考えてゆくことが必要である。大乘戒、小乗戒はあくまで別な二つではなく、一つの戒の二面であるとみられるのである。なお、この問題については、紙面の都合で別にゆずることとする。

常務理事会開催

全仏常務理事会を六月二十七日午後二時から知恩院で開催。機構改革にともなう制度調査委員会の設置が議案となり、委員選出と改革内容は事務局で立案することとして承認された。

その他、報告事項として(1)野田市仏の千葉県仏合併の地下鉄駒沢駅設置運動が報告された。なお次回の常務理事会は八月二十日、全仏事務局で開催される。

昭和45年8月1日

全仏は如何にあるべきか (一)

前進策に与論を喚起

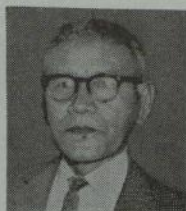
全一仏教運動は如何にあるべきか、これは全仏教徒の共通の課題である。全仏は財団法人として発足以来十三年間、わが国仏教界の代表機関としてこの課題に取り組んできたが、いまこそ真の全仏を具現しなければならぬ。そこで

一、全仏機構の改善 二、全仏運動は如何にあるべきか 三、現代における全仏の役割、この三点を全仏運動に共鳴する各師にアンケートした。

全仏にエネルギーを

友松円 諦師

(元全仏事務総長)



私が全仏を手がけた当時は、第二回世界仏教徒会議が持たれて一般仏教徒の関心がつよかったので、

「僧俗一本」で推進してゆこうとしました。政財界の一流の人物を動員しようと思つてました。

この方針は以後、年と共に後退して今日では仏婦のみになっていますが、これは今後、もう一度、改めて考え直すべき点ではないでしょうか。これは実際にはなかなかむずかしいのですが、これを押し切ったゆかぬかぎり、各宗団だけの些細な負担では大きい仕事は出来ず、有力宗団中心、したがって宗門の要人中心の全仏になってしまいます。日本には一億の人口がある以上、その半分は仏教徒で

す。これを一つ工夫して全仏のエネルギーの中心によせることが大切だと思います。

そうすれば毎年の仏教徒会議にしてももっともり上がってくると思います。一つについて僧侶中心、宗派中心の全仏であつては必ずゆきづまります。もっと、広く世間の仏教信徒から智慧をかりて、予算もいまの少くとも十倍以上にし、局長も、つねに、僧俗一体でゆくべきです。今日の如き兼職のような二足わらじの局長が中心では大きな仕事は出来ません。立派な仏教信者を日本中からさがし出すことは不可能ではないと思います。全仏がこうなったのも、スタート当時の力不足のためであると痛感しています。

したがってこの三番目の問題も、いくらでもやるべき方法や仕事があります。パチカンの組織を一つ参考にしたらどうです。もっと生きた問題、安保にせよ、大学問題、ケバ学生にせよ、創価学会にせよ、全仏こそが中心になって一つ一つ方針を示して行ってほしいのです。それ

には専門の有識者による委員会をもって活発にやってほしいのです。

布教についても、全仏として毎年各地で国民的な講習会をもつべきです。武道会館や国技館をかりねば収容のできぬほどの圧倒的な集会をもちうると思いません。私がお手伝いしていたころは曹洞宗の佐々木泰翁師が原動力で、全仏を曹洞宗一つでもやるという気分でした。今日でも、有力の宗団が一つ、自宗の勢力を傾けて全一仏教運動に力をそいで下されば全仏ものになりません。しぶしぶ割り当てを拠出してそれで文句をつけているような及び腰では駄目です。

右不十分なが、私の卑見を申し上げて、大方のおしかりをうける覚悟です。

全仏の改善は如何にあるべきか

麻布照海師

(元全仏事務総長)

全仏の創立当初は各宗派の懇親会的集まりであつたと聞かされている。各宗はそれぞれ自宗の事業を持っているので、仏教連合会としての全仏は別段事業を必要としなかったが、対外的には統一仏教会の様相を表現し、段々とこれが整備されて、昭和三十二年八月二十三日に財団法人全日本仏教会を設立し今日に至つたのである。

この度、万国博覧会に全仏では「法輪閣」を建設し、その開所式に当り、偶々

式場にて焼香洩れに端を発して遂に全仏機構改善までになった。その原因は司会者の疎漏からその司会者の関係せる宗派まで越権と云々され、終には全仏脱会迄に発展したと報告されている。しかし当日の焼香順序にはその宗派並に代表者も記載されていたということであり、何も故意に読み上げを除いたのではなく、全く司会者が狭い暗い会場内において多数の参列者のもとに上気したに過ぎず、大衆の越権でもないことで、私たちでもよくあることでもあり、当局者の陳謝で寛大に取り扱われたいものである。たとえ全仏を宗派が脱退しても、地域においてその宗派の關係せる寺院は地域的仏教会の会員である。今日の時点では、地域の諸寺院はその地域内の各寺の税務並に環境衛生、その他諸事業等、寺院の利害關係の各方面にわたり、その宗派より反つて地域仏教会の世話になり、全く全一仏教の趣意のもとに團結されている。

しかも他の教団を他視することなく、手を結び何処で会つても敬意を表する僧侶となつてゐる。もし地域内で異端者となれば早速税務にも、また寺院の利害に対しても不都合を来すことになるのは当然である。是の如く地域仏教会は段々と全一的仏教会のもとに強化されていることを各宗派においても認識すべきである。これに關してのこの度尾を引いて全仏機構改善にまで発展したと聞き及んでい

るが、筆者もかつて全仏の事務にたずさわつた経験により、この際一、三改良

すべき点を述べて置きたい。

まず全仏の寄付行為第二章の目的および事業にあるがごとく、全仏の主旨は明瞭に表明されているので、いずれにもこれに対していうことはないが、しかしこの運営に関して、会長、理事らの機関とこれを実施する事務総局などについて、全仏加盟団体の末員に至るまではつきりとした人事組織にすべきである。まず(1)会長は大宗派のみならず、全加盟団体多数の内から有能の人士を選ぶべきで今日の如く、大宗派の廻り当番制は反って小宗派より越権に取られる恐れもあるから、全加盟団体から適当なる方法で選出すべきである。

また、今日では会長は単に会の象徴にすぎないが会務を運営統轄して行く以上は、会長はその責任を持つのは当然であり、現代の社会情勢より見ても遺憾である。筆者が全仏事務総長時代時の高階会長は、これに対して異議を申されたので、局内会議らのことまで逐一故阿部竜彦伝師と共に管長待室候所まで報告したものである。

(2)理事は四十名以上五十名以内とあるが全然理事会にも、また全仏の協力方に対して無関心の理事が多数あったことを記憶するが、定数にこだわらず、単に宗派の羅列にすぎぬ点を改め、むしろ、地方で全一仏教運動に協力する地域的仏教会や団体をピックアップすべきである。

(3)全仏の常務理事についても、単に宗派

にこだわらず、全一仏教運動に協力する理事より選ぶべきである。たとえば「法輪閣建設」についての助成寄付に宗派は別にして、常務理事や理事の中で何人の協力者があったか疑問である。

(4)評議員について、通例社会においては理事会常務理事会における決定事項について、監察的役割を持つているのに全仏では此等の決定事項の改良機関でなく、単に理事の選出機関にすぎない。

(5)事務総局について、現在では事務総長総務、文化、国際組織の四局長とそれとに各部長、主事、書記があるが、総長と各局長は宗派から選出し、しかも無給である。これに関してある宗派では宗派よりこれに相当する宗派内の待遇並びに財物の補助もあると聞きおよんでいる。しかし筆者の如きは、勿論宗派より推選され、その宗派の面目上幾多の苦勞も重ねたが、全く無関心で宗派内の待遇もまた財物らの助成すらなかった。しかも毎年宗派の負担金なども自派へ頭を下げて依頼する程で、それでも、自派の会計より廻金が来ないことが度々あった。以上の如く宗派においていろいろ待遇も異っている

のでこの際無給であり、しかも宗派の指示ある局長を罷して、部長制に切り替え、事務総長のもとに、総務部長、渉外文化部長、国際部長の三部長とし総務部長のもとに経理、庶務、文書、渉外文化部長のもとに文化、渉外、組織に、国際部長のもとに東南アジア、

ヨーロッパ、アメリカの部門として各主事を置く。また、筆者が事務総長の時代に、故阿部竜彦伝師が事務総長を補佐して頂いた例もあるので、今後の全仏の事務も多忙となるので、事務総長を助ける事務次長の制度も必要になって来ると思われる。

(6)事務実施運営に付いても単に局内会議等に出席する局長や、それにつれてまた部長でも月に二、三回の出勤だけする者もあると聞く、それゆえに事務処理は必然と主事まかせになるので、常務理事諸師よりも、運営立案に際しもつと建設的な進言を必要とする次第であると思う。

(7)全仏の役職員の任期は二年となつていて、二年では何にも出来ない、少なくとも三年とすべきである。

(8)宗派も加盟団体も時代に即応する活発な全一仏教運動展開を予期し要望するならば、事務担当者に有能な人士を広く各宗門より推選し相当なる給与を支給し、安心して勤められるような体制にすべきであり、しかも所属宗派でもその待遇に付いても考慮すべきであると思う。

『現代における全仏のはたす役割について』

一、敗戦後は世情に大変改を来し、科学文明の発展と経済生長は著しい変化をわれわれ人間に与え、人間の物の見方考え方までも変えている今日である。この時全仏こそ寄付行為第二章(第四

条)にある如く、仏陀の和の精神を基調とし、時代に即応する全一仏教運動を展開し、世界の仏教徒と手を握り、人世の障碍を取り除き、世界平和の進展に寄与するよう、その基盤に人間性の復活を求める態勢に指導目標を置くべきである。

二、東南アジア、特にタイ、香港、台湾における仏教は、統一された仏教会のもとに組織されている。しかしながら日本においては各宗に本山あり、そのもとに競って自宗の事業計画を実施している。各国より見ると日本仏教は不統一であるように見られている。そこに日本仏教の代表機関としての全日本仏教会は全一仏教運動のもとに、仏教による国際文化の交流を促進し、世界平和の進展に寄与するようもつと協力すべきである。

全仏機構の改善について

伊藤勝淳師

(元全仏組織局長)



現在の様な宗派中心から、都道府県仏教会(以下県仏という)に切り変えるべきである

両輪に譬え、出すものは宗派から、仕事は県仏に、というやり方では将来性がな

い。 県仏所屬の寺院の中には、所属宗派とかわれわれの宗費による負担金を出しているのに、さらに県仏から出すのは二重の負担であるという声も聞えて来る。 全仏の議決機関は理事会である。しかしながら理事を与えられない多くの宗派県仏がある。自分らの知らない間にいろいろのことがらで議決され、あとで報告があるだけである。靖国神社の国家護持反対の声明文を出しても、賛成の加盟団体が出ている。

現在の様な宗派中心では、加盟団体の負担金の違いが大き過ぎるから、人事の面でもその他の面でも、大宗派偏重の全仏になることは当然である。県仏中心になれば、全日本の仏教会を代表される様な人に会長になってもらえることが出来る。先年物故された妙心寺の古川大航師や、現身延山法主の藤井日静師の如く、四大宗派に入っておられないということだけで会長にもなれないという不合理もなくなるわけである。

2、全仏運動は如何にあるべきか 「全国の各種仏教運動に全一性と計画性をもたせ、真に時代に即応する活発な全一仏教運動の展開」ということが全仏の寄付行為の目的の中に示されている。要はこれを誰がやるかということである。これの具体的な運動は、全仏の機構が県仏中心に移れば、県仏が自らの判断により、この地域に合った運動を展開する。したがって表題の答えは自から出て来る

と思う。 3、現代における全仏のはたす役割について 現代は何事によらずスピード時代である。全仏がごとくに宗派を通してやっていたのでは、とてもこれについていけない。新興教団においては、今日議決されたことは数日中に全国に流され、直ちに実行に移すことが出来る。

県仏の機構は、地域的に非常にこれら要素を具えている。現在は県仏といっても、ピンからキリまでであるが、県仏一本になれば各県共に活発な運動が展開されると思う。過去に仏教徒大会を開催された県仏が非常な組織力を以て全一仏教運動を展開しつつある現状を見れば、一日も早く踏み切るべきである。事業体であるべきかという質問に対する解答にもなると思う。

以上、全て県仏中心礼賛の文章となっているが、要は現状の機構の保ていくら名論卓説を述べても、実行不可能であるとの結論によるからである。

財団法人の責任

板橋宥成師 (全仏総務専門委員)

昭和三十二年全日仏が財団法人として法人格を獲得するにあたって、当時の全仏事務局、理事は加盟諸団体にその目的および運営らについて充分な審議、検討の場を与えずいたずらに法人格を得ることに急いで、自らおよび加盟諸団体の意

識革命を認識させずして財団法人全日本仏教会として発足した。このことは型だけの財団法人であって、旧全日本仏教会と何ら変革意識もなく十三万年の空白期間を続け、今日それが与論となって批判されているのである。

全仏がどのように体質を改善して全仏運動を展開してゆくか、財団法人として運営されなければ、全仏の存在は無意味であると決断した設立当時に顧み、ここにこれを再検討し、加盟諸団体もこの寄付行為が最高最善の道であると再認識して、これが実現されてこそ全日本仏教会であると再認識され結集されたとき、自ら機構も改革され全仏運動も推進されてゆくものである。このことは誰もも充分理解していながら、それを切り開いて行く勇氣と努力がなされなかつたところに全仏今日の悲運を招いているのである。

時節当来このときに現理事事務局諸賢は当面の責任者として綿密な計画を立案して、寄付行為の目的、事業を顕現し得べく努力すべきである。勿論このことは限られた人々、限られた日時をもって遂行し得るものではない。理論的検討を充分重ねるとともに、加盟諸団体の理解説得に十二分の努力をなすべきである。

(日野照護師その他教師より、この問題につき御意見をいただきましたが紙面の都合により次第に掲載します。

なを全国の僧俗仏教徒よりも、この問題についての御意見をまとめています。 (編集部)

浄土宗全書

—日本仏教の成果 浄土教のあけぼの—

- 予約申込規定 全四十二巻予約申込者のみに限り出版します。
- 定価 各巻 2,000円/特価 全四十二巻一時払80,000円/申込期限/昭和45年7月末日 ※内容見本進呈※
- 刊行 期日 昭和45年4月第一巻好評発売中・第二巻5月配本・第三巻6月配本・毎月一冊刊行
- 御申込みは大正大学浄土学研究室・仏教大学浄土学研究室・右記発売元又はお近くの書店が浄土宗宗務支所にお申込み下さい。

★おわび—解説・執筆者塚本善隆先生ご病気の為2回配本が遅延いたしましたことを、ご購読者各位に深くおわび申し上げます。

発行所 浄土宗開宗八百年 記念慶讃準備局

総発売元 山喜房仏書林

東京都文京区本郷5-28-4東大赤門前 TEL.03-811-5361 振替 東京1900

転法輪

全一仏教運動の今後

——キリスト教アジア開発

会議に出席して——

「大法輪のもと、仏教徒はより強く、より大きく団結して前進しなければならぬ」と叫ばれること久しい。毎年、全日本仏教徒大会でも、恒例のように、このテーマを取り上げられて来た。「全仏」という組織も、結局はこのようなテーマの実践団体として創られたものに他ならない。併しこのような願望にもかかわらず、全一仏教運動の理念も、そして実践も何ら具体的には確立していかない感じが深い。裏面には、いろいろな事情があったにしても、智山派の爆弾的全仏脱退表明は、この微温的な全一仏教活動の現状を反省する一つの大きな動機となったようである。仏教界の衆知を蒐めて、前進仏教の具体策が生み出されることを願ってやまない。筆者はさる七月十四日から、二十二日まで聖心女子大を会場として開催された「キリスト教アジア開発会議」にオブザーバーとして招かれ、全日程ではないが、関心のある問題が議せられる時間には努めて参加し、熱心な討議や、礼拝、ミサなどを見学、聴講した。

このたびのキリスト教アジア開発会議は、カトリック、新教、聖公会らが台同主催したもので、アジア各国は、それぞれ準備委員会を持ち、二カ年にわたる下工作を重ねて実現したものである。開催地日本でも、日本キリスト教協議会、日本仏教委員会、日本聖公会東京教区などで準備実行委員会を設けて万般の企画に当たったようである。周知のように、旧教は、新教を悪魔の教として極力これを排斥して来た。筆者は曾てアメリカ政府の招きで同国の樹てたスケジュールに基いて約四カ月間アメリカ宗教界を視察したがこのアメリカ政府のスケジュールにさえ力教とブ教は全然共同歩調を取らないのを、あらゆる場合に、いやというほど見せつけられた。カトリックとプロテスタントの激しい対立、これが二十年前、われわれが受けたアメリカ宗教界の印象だった。しかし、少なくともあの老大なNCC(世界キリスト教協議会)の活動を通じて全一プロテスタントの活動には力強いものを感じる。

筆者はこの組織について詳細な説明をニューヨークの本部で聴き、ひどく感銘したので、今の全仏が設立される際、NCCの組織を参考に一試案を作成し、当時の仏連に提案した。故佐々木、北島氏などは極めて理想に近い案として賞讃してくれたが、実現にはなお時期早しとして第二案、つまり現在の全日仏案が採り上げられ、私の試案がただ議題にされて出来上ったのが現在の全日仏法人の寄付行為である。

カトリックの世界的統一組織については今さらいうまでもない。昭和三十八年の秋、筆者らはパチカンに前法王を訪ねて懇談した際、法王はすべての宗教が相互に理解し合い、人類の幸福を祈らねばならないと強調し、仏教徒とも相互理解に努めたいとの熱意を示された。現パチカン当局は、前法王の遺志を継いで公會議を開催し、キリスト諸教派を招いたことは有名である。爾来ローマ法王はカンタベリー大僧正やギリシャ正教の大司教とも会談したが、その後世界教会一致運動の展開となった。そればかりではなくマレラ枢機卿を渉外担当者として、あらゆる宗教との担当理解と協力に乗出している。ある人々はこれをカトリックの世界制覇の野望だと批評する。

このたびのアジア開発会議も「新教」と「旧教」が共同開催として極めて注目値する。レギュラーメンバーとしてセイロン、カンボジア、オーストラリア、ピルマ、香港、インド、印度ネシア、日本、韓国、ラオス、マレーシア、ニュージーランド、西バキスタン、東バキスタン、ベトナム、台湾、ヒリピン、シンガポールなどから約一八〇名、それに国連、E C A F Eをはじめ日本国内の各界からオブザーバーを招いて総計二〇〇名、九日間にわたってレギュラーメンバーは同宿し、いわゆる寝食を共にして統一ムードを盛り上げたことは、会議内容もさることながら、従来の異教徒が思想統一と親愛の実を上げつつアジア開発に取り組みもうとする雰囲気を作ったことは成功だった。

アジア開発と宗教の問題は、いま脚光を浴びている。このことについてはアジアに仏教国が多いだけに、わが「全仏」は逸早くI B E Cと共催してすでに、今年三回目を迎える。キリスト教のこのたびの会議も、われわれの会議記要を充分参考にしているようである。

アジアおよび太平洋沿岸諸国の人口は世界人口の三分の二を占めている。ここにこそ仏教の占める位置の重大さを痛感せざるを得ない。アジア開発という未来の全人類の使命を自覚するなら、日本仏教の全一運動は自から盛り上げざるを得ないではないか。キリスト教はアジアにおいては小さな勢力ではあるが、しかし今や諸教派一致の全一キリスト教運動としてこの問題に取り組みもうとしているところに重要な意味がある。アジアの仏教はどうなのか、いまだ大乘仏教と上座部仏教の相互理解すら出来ていない。しかもアジアの日本がアジアの諸国から、やかもすれば不信を買いつつある。またある国では仏教が拒否され、仏教国同志が戦場で相まみえている。このような現状を熟視することによって、日本仏教は今こそより強い団結でアジアの開発に、そして、それは未来の人類の運命を決するものであることを自覚するなら日本国内ではかりでなく、アジアにおける全一仏教運動の展開は必然的に生まれて来るはずである。アジアのキリスト教化が前進しようとしていることを、キリスト教アジア開発会議でしみじみと感じたことを付言する。

昭和45年8月1日

第十八回全日本仏教徒会議

みほとけのもと総結集

「みほとけのもと、みんなで手をつなごう」の大会スローガンのもと第十八回全日本仏教徒会議新潟大会は全日本仏教会、新潟県仏教会主催により来る十月七日・八日の両日、新潟県長岡市厚生会館を主会場に、長岡文化会館大ホール（第一部会）北越銀行本店大講堂

仏教界の動き

(ニュース・投稿を歓迎します)

- (第二部会) 長岡市厚生会館 大ホール(檀信徒部会) 八方台国民休暇センター(青年部会)等に於て開催される。
- 記念講演は紀野一義学習院女子短大教授が予定され、本年度の会議テーマは
- 1 仏教徒の社会的実践について
- 2 家庭の幸福について
- 3 檀信徒のつながりについて

この三テーマを中心に各部会に於て熱心な討議が期待されている。また大会の記念活動としては慈悲の献血運動(第四年目)が実施される。大会参加資格は各加盟団体の推選する仏教徒で九月二十日迄に全仏事務総局に申込むことになっている。なお大会と併行して第十七回全日本仏教婦人連盟全国大会が十月六日、新潟県高田市厚生会館で開催されることになっている。

両大会ともに現下の社会人心の迷動をみると、大きな意義をもつものであり全国仏教徒の総結集を具現しなければならぬ。



全日仏徒大会会場

長岡市檀信徒会結成

第十八回全日本仏教徒会議新潟大会の地元、おまちうけ対勢の大きな柱ともいわれる長岡市の檀信徒会が、去る二十五日午後一時半から結成式を挙行され、力強く第一歩を踏み出した。

当日、各寺院三十九、檀信徒五百八十九名の総代が、徳聖寺、長永寺、西入寺、善行寺、妙宗寺に地区別に参集し、議

長選出のあと代議員を選び、二時五十分から称贊寺に代議員会を開催した、その間に五会場を巡回して、全仏・市仏の役員が大会の説明と協力を要請した。三時半、代議員会の報告がそれぞれの会場に於てなされ、正式に発会が決議され、四時から祝宴にうつったが、会場を寺院の本堂に壮厳な法要を行ってこの会がもたれたことは、本来の姿とはいいながらこの種の会合に新しい在り方として最も有効であった。なお全仏から桜井組織局長、伊東部長が出席した。

聖域より撤兵を

全仏より国連に要請

東南アジアの動乱は仏跡アンコールワットを破壊の危機におとし入れた。この遺跡はインド仏跡、インドネシアのポロブール仏跡と共に世界の三大仏跡として仏教徒ばかりでなく世界の文化遺産とされている。この聖域を護るため全仏では七月十日、福田理事長名でウ・タント国連事務総長に対し聖域よりの即時撤兵を要請した。

訂正

前号「文化外交の展開」中の誤りを訂正します(三頁)スエズ運河(誤)シンガポール(正)(四頁)セイロン(誤)セイロン(正)パークテキスト(誤)パリーテキスト(正)漢記(誤)漢訳(正)

太平洋諸島戦没者慰霊祭開催

—梅友会第一回全国大会—

举行各種 昭和46年2月 第2週予定 10日間
訪問地 沖縄・グアム・サイパン・ハワイ

旅行のお世話は近畿日本ツーリストが行います くわしくはパンフレットにて

連絡先 ☎ 460 名古屋市中区大須三丁目39番33号

TEL ナゴヤ <052>241-0901・1920

法衣・装束・神仏具 贈答用記念品 梅金商店内 梅友会事務局 幹事 山田二三雄

昭和四十五年八月一日発行
八月号 第一五九号

発行人 伊藤 哲雄 編集人 白幡 憲佑

発行所 財団法人 全日本仏教会
東京都中央区築地三丁目一(築地本願寺内)